

保育科学生の実態 (その3)

—— 音楽とのかかわりについて ——

The Research on the Actual Condition of the Students
of the Infant Education Course and Primary Education
Course : Their Relation to Music

(No. 3)

黒瀬久子 (Hisako Kurose)

藤沢初美* (Hatsumi Fujisawa)

* (山口短期大学講師)

1. はじめに

昨年(1983年)にひきつづき保育科学生の音楽実態を、質問の内容をすこし検討し調査したものの結果及び報告である。

2. 調査方法

調査時期 1984年5月中旬

調査対象 下関女子短期大学保育科、山口短期大学児童教育学科及び併設の保母養成所の一年生

対象人数 下関女子短期大学保育科63名
山口短期大学児童教育学科及び保母養成所140名

調査方法 質問紙により回答を求めた。

3. 調査内容及び結果

音楽実態調査

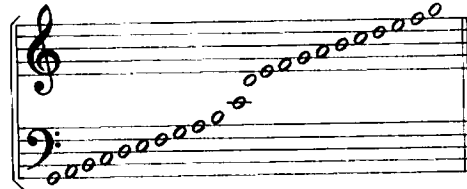
この調査は皆さんの音楽指導に役立てるためのものです。質問に正直に答えて下さい。

(回答は回答用紙に)

- 1) 高等学校で音楽を何年間履修しましたか。
- 2) 今までに音楽関係のサークル、クラブに入っていましたか。サークル、クラブ名、年数をかいて下さい。
- 3) 短大入学以前に個人レッスンの経験がありますか。開始時期、楽器名、年数をかいて下さい。
- 4) 入学後学外レッスンを受けていますか。楽器名をかきなさい。使用している本の名前。
- 5) あなたは今までにどんな楽器を演奏した経験がありますか。
(例 ピアノ、電子オルガン、オルガン)
- 6) あなたはどんなジャンルの音楽を聞いていますか。
- 7) 音楽を聞くとき、どんな物で聞いていますか。(例 レコード、テープ)
- 8) うたうこと、弾くこと、聞くこと、創ることのうちどれが好きですか。
- 9) 楽譜を見て問いに答えなさい。



- ① Cは何分の何拍子ですか。
- ② ♩ は何ですか。
- ③ 上の段の階名をかきなさい。
- ④ ♭ は何ですか。
- ⑤ 下の段の階名をかきなさい。
- ⑥ ②-⑤までの音符と休符の名前をかき、それぞれの長さをかきなさい。
- 10) 幼児音楽で特にどのようなことを学びたいと思いますか。
- 11) あなたは幼児教育における音楽をどのくらい重要視していますか。a-eまでのうちあなたの考えているものに○をつけなさい。又その他あればかきなさい。
- 12) あなたの声域について五線上に「」でかきなさい。



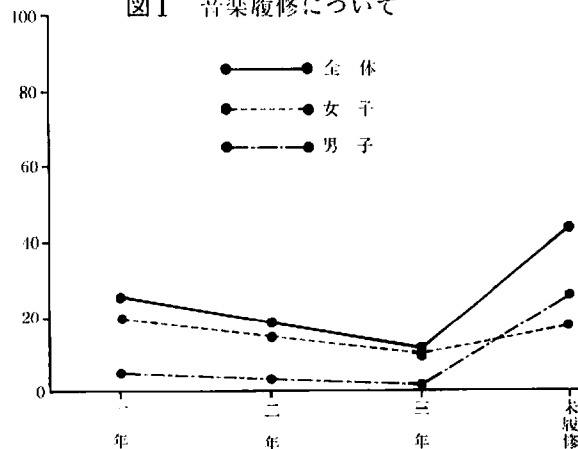
1) 高等学校で音楽を何年間履修したかという質問に対する結果は図1の通りである。

音楽を履修している割合は女子が多く、未履修では逆に男子学生が多い。

また履修年数も一年、二年、三年と減少している。

音楽の履修年数が多いとはいえ、音楽に堪能で、理解度が高いとはいえない。しかし高等学校で音楽をまったく履修していない学生よりも感覚的な面はよいように思える。

図1 音楽履修について



2) 音楽関係のサークル、クラブについて

この質問に対する回答は図Ⅱのような結果である。

音楽関係のサークル、クラブの経験者が非常に少ない。音楽のクラブ経験者より運動部での経験者が多いのではないだろうか。

また運動部に比べて音楽関係のサークル、クラブの部の数が少ないことも考えられる。

小学校から高等学校の12年間で男子学生が70名中57名が未経験者であり、女子学生133名中78名が未経験者である。

小学校、中学校、高等学校でサークル、クラブ経験の数値に大差はない。小学校で経験したものが中学校、高等学校と引きつづきサークル、クラブ活動をしていると思われる。

サークル、クラブの内容も、小学校では合唱部、音楽クラブ、鼓笛隊。中学校ではプラスバンド、合唱部、高等学校ではプラスバンド、合唱部、箏曲部となっている。

3) 短大入学以前のレッスン経験について。 この質問に対する結果は表Ⅰの通りである。

レッスン経験の年数に関係なく、レッスンを受けた経験のある人数をみると105名がなんらかの楽器のレッスン経験者である。

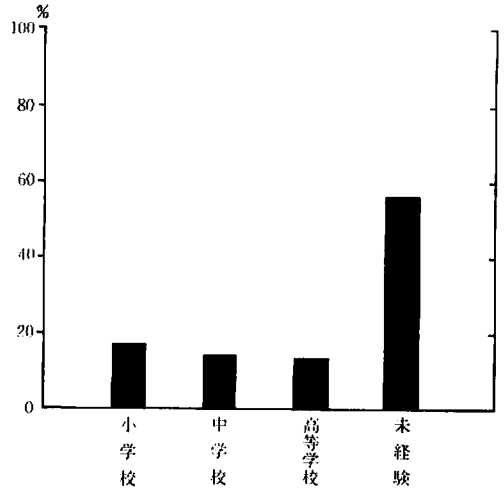
そのうちピアノのレッスン経験者が圧倒的に多く、ついで電子オルガンである。

なかにはピアノと電子オルガンの両方のレッスンを経験しているものもいる。

しかしこの105名中一年未満でレッスンをやめた者が16名いた。

その他をみると、バイオリン、ギターのレッスン経験者。またオルガンとピアノ、オルガンと電子オルガン、ピアノとバイオリン、ピアノとギターといった二つの楽器のレッスン経験者もいた。

図Ⅱ サークル、クラブ経験(音楽関係)



表Ⅰ 入学以前のレッスン

楽 器 名	実数	%
ピアノ	84	41.4
ピアノと電子オルガン	6	2.9
電子オルガン	5	2.5
その他	10	4.9
未経験	98	48.3

4) 短大入学後学外レッスンを受けているか、下の表Ⅱのような結果である。

表Ⅱ 入学後の学外レッスン

楽 器 名	実数	%
ピアノ	21	10.3
ピアノと電子オルガン	3	1.5
電子オルガン	1	0.5
その他	1	0.5

ピアノのレッスンを受けているものが21名(10.3%)いるが、電子オルガンの普及にともない、ピアノと電子オルガンの両方、そして電子オルガンのみのレッスンを受けているものが4名いる。

これは幼稚園でも電子オルガンを保育の中で使用している所もあるところから、こうした傾向がみられるように思う。

5) 演奏した楽器について

これは小学校、中学校の義務教育の授業でピアノ、笛、ハーモニカ等を経験していると同時に、音楽会等で演奏した楽器すなわちアコーディオン、鈴、トライアングル、木琴等があげられている。

また吹奏楽に入部した経験のある学生は、クラリネット、アルトサクソ等の管楽器があがっている。

ピアノや電子オルガンの個人レッスン経験者は、ピアノ、電子オルガンが演奏経験のある楽器としてあげられ、短大入学以前にレッスンを受けた楽器でピアノが圧倒的に多かったごとく、演奏楽器もピアノがリード楽器につくものである。

6) どんなジャンルの音楽を聞いているか、という質問に対する回答は表Ⅲのような結果である。

表Ⅲ ジャンル

分 野	人数	%
1 ニューミュージック	71	34.9
2 歌謡曲	70	34.5
3 ポップス	39	19.2
4 フォーク	38	18.7
5 ロック	27	13.3
6 クラシック	22	10.8
7 その他	19	9.4
8 無回答	4	1.9

二つ以上の回答をしたものが多く、100%以上になっている。

表Ⅳ どんなものできくか

器 具 名	実数	%
1 テープ	185	91.1
2 レコード	96	47.3
3 ラジオ	34	16.7
4 テレビ	15	7.4

ある。

圧倒的にポピュラーが多く、なかでも昨年の調査では歌謡曲が4番目であったものが2番目になっている。

またニューミュージックが3番目であったのが1番目になっている。クラシックの順位は昨年とかわっていない。

7) どんなもので聞かか、という質問では表Ⅳのような結果である。

テープで聞くと答えたものが91.1%をしめている。最近ではテープが手軽に入手でき、持ち運びも簡単で、どこにいても聞けるということからこのような数値が出たものと思う。

またこれに対する回答も二つ以上の回

答者が多かった。

しかし各家庭に普及しているテレビであまり聞いていないのは意外である。

8) うたうこと、聞くこと、弾くこと、創ることについての結果は表Vの通りである。

聞くこと、うたうこと、弾くこと、創ることという順の回答であった。

これら四つの分野のうち四つ全部に回答したものの10名、三つの分野に回答したものの13名、二つの分野に回答したものの28名も含まれているので100%以上である。

表V うたう、きく、ひく、つくる

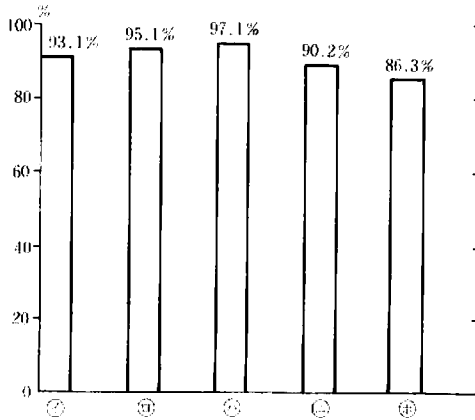
分 野	人数	%
聞く	143	70.4
うたう	86	42.4
ひく	50	24.6
つくる	12	5.9

またどれも好きでないと回答したものが1名いた。

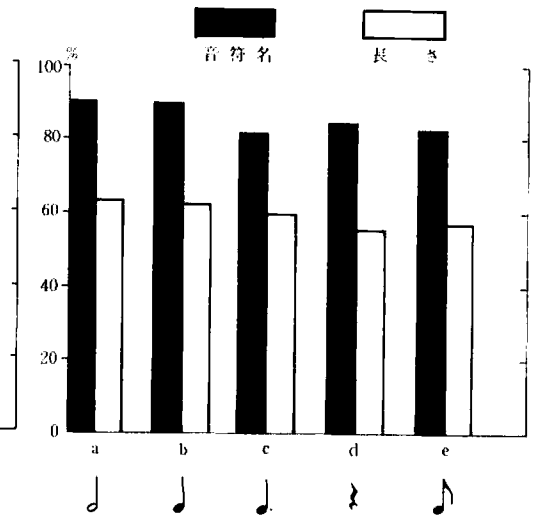
聞くことが圧倒的に多いのは、質問6、7との関連からみても、いつでもどこでも手軽に自分自身で聞くことができるという利点が考えられる。

9) 楽譜をみて問いに答えなさい、という質問の結果は図Ⅲ、Ⅳの通りである。

図Ⅲ 記号と階名の正解率



図Ⅳ 音符と長さの正解率



図Ⅲ④のC拍子記号について $\frac{4}{4}$ 拍子であることはわかっているが、さてその意味することとはとなると全員理解されているか疑問である。

②のト音記号、③のヘ音記号について記号名は理解しているが、五線上に書くと正しく書けない。すなわち起点がはっきりしていない。



ト音記号の場合、譜表Aの右のごとく五線内におさめてかく。

へ音記号の場合、譜表Bの右のごとく点のうつ場所がはっきりのみこめていない。

㉔のト音譜表と㉕のへ音譜表の階名は読めるが、特にへ音譜表をト音譜表で読んだものが2名いた。

図Ⅳの音符の名前と長さについては、付点の意味することと、休符と音符の関係が理解されていない。音符の名前はわかるが、長さの理解ができていない。理論的にどの程度理解されているか疑問である。

10) 幼児音楽で特に学びたいと思うことについての回答は非常に多くの内容のものがあった。そこで次のような分類を試みた。(表Ⅵ)

表Ⅵ 幼児音楽で特に学びたいこと

項	目	実数	%
内容的なもの	・幼児のいろいろなた	34	16.7
	・楽しい曲	8	3.9
	・幼児が興味を示し、好きになるような音楽	8	3.9
	・鑑賞のためのしみ方	3	1.5
	・音楽史	2	0.98
	・指揮の仕方	1	0.49
	・音楽リズム	1	0.49
楽器	・リズム楽器の奏法	9	4.4
	・合奏	5	2.5
技術及び指導法について	・ピアノ	19	9.4
	・楽しみながら学ばせる	16	7.9
	・楽しくうたい、表現できる	14	6.9
	・うたいびき	9	4.4
	・動きのリズムがピアノでひける	7	3.4
	・初見視唱	4	1.97
	・動きのリズムができる	4	1.97
	・うまく指導できるレベルになりたい	3	1.5
	・伴奏がうまくひける	2	0.98
	・初見視奏	2	0.98
	・発声	2	0.98
	・音楽を知りたい	2	0.98
	・聴力	1	0.49
	・持来役に立つもの	1	0.49
・音楽が幼児にとってどういうものか	1	0.49	
・季節に応じた遊び	1	0.49	
その他	・わからない	4	1.97
	・無回答	37	18.2

技術及び指導法に関するものが多く、その内容も数多くのものである。しかしそのうち音楽を楽しく学ばせ、楽しく表現できる、という指導上のテクニックとピアノの問題に不安を感じている。

ついで内容的なものの数値が高く、そのうち歌に関するものが多い。つぎに基礎的なもののうち、リズムが問題と考えられる。ついで楽器については、リズム楽器の奏法の取得と合奏の経験と学習をつむことが大切であると考えられる。

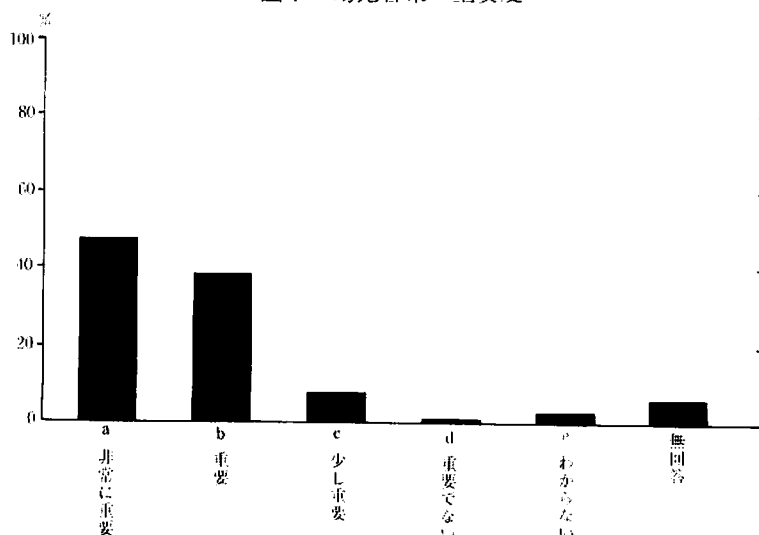
また表のように学びたいことについて、多くの内容が述べられているにもかかわらず、無回答、わからないという数値が多いことに驚くと同時に、学生の幼児教育に対する関心と努力がより必要であると考えられる。

11) 幼児教育における音楽の重要度について図Vの通りである。

入学時点では指導内

容のみ込めていない
ようであるが、幼児教
育において音楽が重要
と考えている割合が多
い。最近では幼児教育の
重要性についての論議
がよく聞かれ、学生も
社会のこうした状況を
感じとっているように
思える。

図V 幼児音楽の重要度



12) 声域について

この質問については、歌声と地声の区別が学生自身に判別できず正確な数値が出せなかった。しかし非常に高音まで出せると答えながら、幼児のうたに関して、のびのびと正しい音程で、楽にうたえない。また逆に非常に声域が低く、幼児のうたに関する音域が楽に出せず、常にオクターブ低くうたっている学生がいる。

全体的に最近の学生は美しい声でという意識にかけている。ただ声を出せばいいという感じであっている。

しかし子どもたちを保育するうえでは、どならず、すなおな声で、よく聞こえるようにうたうことが大切なことはいうまでもなく、高い声が出せないからといって移調してうたわせることにはまた疑問がある。

この項の質問の仕方は一考を要する。

考察及びまとめ

保育科及び児童教育学科生の音楽に対する実態を調査するにあたり、昨年と同じ質問項目は

- 1) 高等学校で音楽を何年履修したか。
- 2) 小学校、中学校、高等学校において音楽関係サークル、クラブに入っていたか。
- 3) 短大入学以前の個人レッスンの経験。
- 6) どんなジャンルの音楽を聞いていますか。
- 8) うたうこと、弾くこと、聞くこと、創ることのうちどれが好きですか、であった。

これらを昨年と比較してみると1)の問いについて、音楽の履修は女子が多く、男子は昨年同様履修者は少ない。また1年、2年、3年と履修者の数が減少している。

つきに2)の質問に対しては、昨年に比べると小学校、中学校、高等学校ともにクラブ、サークルの経験者が減少し、3)の質問に対しては昨年は和楽器、ソルフェージュ、声楽、音楽教室という回答があった。しかし本年の調査ではピアノ、電子オルガン、バイオリン、ギター、管楽器以外のレッスン経験者がなかった。

6)の質問に対しては昨年同様ポピュラー音楽を好んで聴いていることにおいては同じであるが順序が入れかわっている。

8)の質問についても、聞くこと、歌うこと、弾くこと、ついで創ることの順序は昨年同様であった。

その他の質問項目は昨年と質問内容を変更した。このことで学生のありのままの状態が把握できたように思える。

すなわち義務教育での初歩的な事柄が理解できていないことや、将来幼児教育にたずさわろうという目的をもって入学し、又専門分野の一つである音楽に対する学生自身の目的意識と同時に、学生一人一人の音楽の向上と子供にとってよりよい音楽の指導者及びよりよいモデルとなるよう、今後の指導内容を考えたい。

〔参考文献〕

山口短期大学紀要第5号